

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第七十弾

神社本庁再生への道—その三十三

神社本庁別動隊・神道政治連盟の悲しき現実
—偽装が剥がれ落ちてゆく田中—打田体制

からも役員会で過半数を超す田中派理事の面々と、神道政治連盟を通じた政界との繋がり

が、田中—打田体制の命脈である。しかしそれも、今まさに尽きようとしている。今号では、後者の痛ましき現実をお目にかける。

建前と本音、理想と現実の落差

一昔前、私立大学出身者で、はじめて戦前の高等文官試験に合格し、内務官僚から戦後は警察庁警備部長、警視總監などを

経て政界に進み、参議院議員を務めた秦野章という政治家がいた。氏は法務大臣時代に、「政治家に徳目を求めるのは、八百屋で魚を求めるようなもの」と雑誌で発言して物議をかましたことがある。

権力闘争に明け暮れるのが宿命の政治家の生誕を正直に表明

藤原登 (フリーライター)

したに過ぎないが、当時は各方面から批判を浴びた。政治家の力量は、発信する言葉の中身と説得力で決まる。しかし、的を絞らずに、メディアでさえ触れない理想と現実の落差を直言すると、失言とされてしまう。秦野大臣の発言はその典型であったが、当時も今のように失言政治家だらけであったなら、さほど問題にならなかったらう。

とは言え、どの時代においても、建前と本音、理想と現実との関係は、その落差が誰の眼にも明らかであればなおさら言わぬが花で、それを言ったらおしまい、という風潮がある。しかし、時代の交革期には、そうであってはならない。故に、政界以上にその悲しき実例である今の神社本庁、特にその別動隊で

昭和四十四年に結成された神道政治連盟の綱領には、五ヶ条の冒頭に「神道の精神を以て、日本国国政の基礎を確立せんことを期す」と記されている。一國の政治は、その国の伝統や文化の上に成り立つ。そして、「神道」の定義は一筋縄ではないにしても、「神道の精神」という言葉に対して、国民の多くは、「清浄」「正直」「謙虚」「忠誠」など、日本人が大切に思っている徳目を思い浮かべるはずだ。ならば、神道政治連盟の役割の一つは、権力闘争に明け暮れる政治家に対し、神道人らし

い方法によって、「神道の精神」に通じる日本人の徳目を伝え、それが政治の場で少しでも活かされるようつとめることにあるだろう。しかし、ここでも現実には、理想の遥か彼方にある。打田文博会長率いる今の神道政治連盟に「神道の精神」を求めることは、八百屋で魚を求めることよりも遙かに困難な状態である。適当な表現が見つからないが、強い店で、ベジタリアン料理を注文するようなものだ。これでは秦野大臣の「失言」のように、笑いのネタにすらならないが、その証拠は、以下の事例に見る通りである。

対する発言権を強化、維持することであって、国家的課題については、はじめから何の主張もないと考えざるを得ない。その証拠に、神道政治連盟の公式HPに掲載されているのは他人の見解や主張だけであって、独自の主張は皆無である。

▽その中で唯一、しつこく具体的主張を繰り返していたのが、性的少数者をめぐむ問題であるが、これをまさに、統一教会の別動隊である国際勝共連合の主張と、同質の内容である。そして、性的少数者には精神的疾患があるとの説を唱えるキリスト教神学者の差別的かつ非科学的な主張まで取り入れて、LGBT法案に反対し続けた。

しかし昨年、その主張を掲載した印刷物を国会議員に配ったことで社会的非難を浴びると、何の反論も反省の弁もないうちに、公式HPから当該主張が掲載された機関誌を削除して、未だに素知らぬ顔を通して、大使によるLGBT法をめぐむての内政干渉とも言える発言について、一言の抗議すらない。

神道政治連盟国会議員懇談会の会長でもあった安倍元総理の生命が、理不尽にも奪われた原因には、統一教会の問題があった。宗教法人の解散命令も取り沙汰されているこの問題に対して、神道政治連盟には自らの見解を表明する社会的責任があると思う。しかし、一年経つても何も聞かえてこない。神道政治連盟を率いる打田会長の関心は、政治権力者に媚を売って関係を結び、それを誇示すること

で神社界内部、特に神社本庁に

▽神道政治連盟国会議員懇談会は、名簿を見る限り自民党のみで構成されているようだ。特定政党のみと関係を結ぶことは、果たして神道の精神に叶うことなのであろうか。八百万の神々が哭いておられると思う。

▽神道政治連盟の打田文博会長は、神社本庁が川崎市に所有していた職員職舎を廉価で買い取り、即日転売して大儲けしたディンプル・インターナショナルの高橋恒雄社長とは、二十年

来の付き合いであることを、六年前の週刊文春の取材で認めている。こういう人物が未だに会長に居座り続ける団体に、そもそも「神道の精神」を口にする資格があるのだろうか。関係者はじつくり考えて欲しい。

筆者は、神道政治連盟が過去に果たしてきた大切な役割を知らないわけではない。しかしこのままでは、神社本庁正常化に向けての最大の障害物になりかねない。神道政治連盟にも、内部から自浄と正常化の炎が盛り上がることを期待したい。今から遅くはないのだ。

もはや「不要不急」の存在に

藤原 登 (ふじわらのぼる) 昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。